令和元年度大台ヶ原自然再生推進委員会

議事概要

1. 日時 令和2年2月28日(金) 13:30 ~ 16:30
2. 場所 奈良春日野国際フォーラム 会議室1
3. 参加者

【委員】

高柳 敦 京都大学大学院農学研究科 講師
松井 淳 奈良教育大学教育学部 教授
村上 興正 元京都大学理学研究科 講師
揉井千代子 公益財団法人 日本野鳥の会奈良支部 幹事
横田 岳人 龍谷大学理工学部 准教授

【オブザーバー】

近畿運輸局 交通政策部交通企画課	木下 佳介 企画第一係長
近畿中国森林管理局 計画保全部 保全課	上口 進 自然再生企画官
近畿中国森林管理局 三重森林管理署	役田 学 地域林政調整官
奈良県 農林部農業水産振興課鳥獣対策係	天野 留奈 主任主事
奈良県 暮らし創造部景観・環境局 景観・自然環境課	森 順児 課長補佐
上北山村 地域振興課	更谷 亮太 主事補
川上村 地域振興課	玉井 孝明 主事
大台町 産業課	福岡 孝太 主事
吉野きたやま森林組合森林経営課 (一財) 自然環境研究センター	山岸 元博 参事代理 安齋 友巳 研究主幹 千葉 かおり 主席研究員 中田 靖彦 主任研究員 日名 耕司 研究員
(株) 地域環境計画	石山 麻子 テクニカルマネージャー

【事務局】

環境省近畿地方環境事務所	河本 晃利 所長
	玉谷 雄太 国立公園課長
	澤志 泰正 野生生物課長
	西 大輔 生物多様性企画官
	戸田 博史 野生生物課課長補佐
	岩田 佐知代 吉野熊野国立公園管理事務所 公園利用企画官
	関 貴史 吉野管理官事務所 国立公園管理官
	小川 遙 吉野管理官事務所 自然保護官補佐
(株) 環境総合テクノス	樋口 高志 環境部 マネジャー
	樋口 香代 環境部 リーダー

4. 議事

- (1) 令和元年度大台ヶ原自然再生事業検討状況の概要報告
- (2) 大台ヶ原自然再生事業における令和元年度業務実施結果
- (3) 大台ヶ原自然再生事業における令和2年度業務実施計画（案）
- (4) 令和2年度大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定（案）
- (5) その他

5. 概要：

- (1) 令和元年度大台ヶ原自然再生事業検討状況の概要報告

- ・ 意見なし

- (2) 大台ヶ原自然再生事業における令和元年度業務実施結果

○森林生態系の保全・再生

- ・ これからの課題を考える必要がある。大規模防鹿柵は設置すべき箇所は概ね設置できた。また、大規模防鹿柵で囲ってしまうと、ササが繁茂し、多様な植物種が回復する状況にならないといった課題も見えてきた。植栽したトウヒ苗木も 5mを超える高さのものが出てきた。自然再生事業が始まって 20 年間で温暖化、乾燥化など気候変動の問題も見えてきた。
- ・ トウヒ苗木はしっかりとした手法で植えれば定着するという結果は大きな成果である。早急に森林を戻す必要がある場合は選択枝の一つとしておいてもよい。
- ・ トウヒの植栽は母樹がなく、種子供給が少ない再生ポテンシャルが低い場所では有効である。また、ササの下にトウヒの稚樹が多数あったことも重要なことである。トウヒの稚樹があることとトウヒ林が成立することは別の問題である。ササ草原からの森林化のプロセスは不明である。
- ・ 母樹からの種子供給が少ないため、今後、トウヒは減少するだろう。しかし、潜在的にトウヒが育つ可能性があることはわかってきたのではないか。
- ・ ササ型林床では、シカの個体数が減るとササが回復し、ササに被圧されることによって他の植物の種数、多様性が減少する。特に東大台のミヤコザサを今後どうしていくのかという問題が大きい。真剣に取り組む必要がある。

○ニホンジカ個体群の管理

- ・ シカの齢査定については、成長曲線を解析し、妊娠率との関係をみていくことが今後の課題である。
- ・ 今年度捕獲目標頭数を達成できたのは、足くりわなの空はじき率が下がったことと、今まで制限があり捕獲できなかった場所で捕獲ができたことが大きい。来年度も同じ成果をあげることは厳しいと思う。
- ・ 大型囲いわなは北海道では雪がある時期に実施することによって成果をあげている。大台ヶ原では夏はササが周囲にあるため効果は不明である。
- ・ REM 法の解析精度を上げるためにシカの 1 時間ごとの移動速度を調査することが必要である。そのために GPS テレメトリー調査を実施する。
- ・ ニホンジカの個体数調整するのは、植生を回復させるためである。目標生息密度を 5 頭/km²以下としているが、それで植生は回復するのか。森林更新がうまく進むようなシカの生息密度、希少植物を保全できる生息密度などを検討していくことが今後の課題である。
- ・ 植生が衰退するときのニホンジカの生息密度と回復するときの生息密度は違う。回復が早い種もあるが、種数の回復はなかなか進まない。

- ・ 農業や林業被害では経済的許容水準というものが使われている。

○生物多様性の保全・再生

- ・ 鳥類調査については、今年はコマドリは確認できなかった。コルリは多数確認できた。夏鳥は越冬地の環境変化に左右されるため、1～2年の調査では傾向を把握するのは難しい。
- ・ シカの影響で下層植生が減るとウグイスやムシクイ類が減る。連鎖的にホトトギス、カッコウなどの托卵性の鳥類が減る。
- ・ 統計学的に柵内で鳥類が有意に出現することが示された。藪や茂みを作ると鳥が帰ってくることが示されたといえる。

○持続可能な利用の推進

- ・ これからはガイド制度を地域活性と結びつけることを検討していく必要がある。地域活性は熊野古道と結びつけるなど、広域で考えていく必要がある。
- ・ ガイドの利用者が予想よりも少ない。環境省としてももっと取り上げて欲しい。ガイドを利用しやすくする仕組みを考えるべきである。一般人にとってガイド料は高いというイメージがあるのではないか。
- ・ 来年度は登録ガイドの更新年であるが、今の状況で何人が更新してくれるか不安である。積極的にガイド制度を宣伝すべきである。大台ヶ原に来た人が気軽に利用できるような工夫も必要である。
- ・ 今後は大台ヶ原の自然を見るだけでなく体験するメニューを提示していく必要がある。
- ・ ガイドツアーで防鹿柵の中を見せるなど、自然再生の成果を利用することも検討すべきである。
- ・ ガイドツアーで防鹿柵を利用することについては、慎重に検討すべきである。
- ・ 単なる持続可能な利用ではなく、SDGsとも結びつけていかなければならない。

(3) 大台ヶ原自然再生事業における令和2年度業務実施計画（案）

- ・ 意見なし

(4) 令和2年度大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定（案）

- ・ 来年は利用部門WGを実施しないということであるが、ガイド制度をどう進めていくのかについて、できるだけ早い時期にWGを開催し、いろいろな人の意見を聞くべきである。登録ガイドの更新時期までには実施して欲しい。
- ・ ニホンジカ個体数管理WGについては、2021年の計画見直しに向けた準備をすることを項目として入れて欲しい。

以上、意見の順不同